

②9 AI語り部で伊勢湾台風を次世代へ

受賞機関 一般社団法人中部地域づくり協会

キーワード AI、持続可能な災害伝承、双方向型コミュニケーションツール、対話型防災啓発、伊勢湾台風、防災教育支援

全建賞審査委員会の評価ポイント

伊勢湾台風から65年を迎え、人工知能を活用した「AI語り部」を通じて、防災講座で記憶や記録を次世代に伝える取組。記録集や体験談をAIに学習させ、生徒が質問するだけで、当時の状況を知ることができる仕組みを構築。生徒の探索負担を軽減し、教師の負担も軽減する挑戦的な取組で、災害を風化させない活動が評価された。

1. はじめに

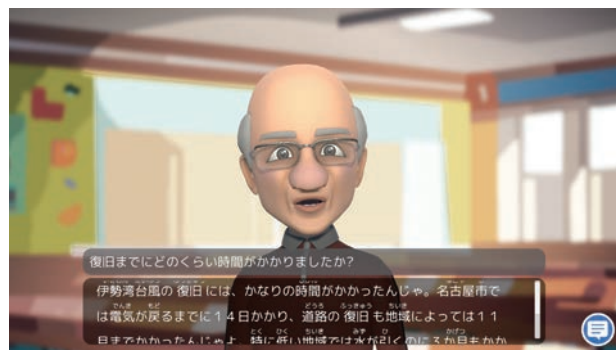
伊勢湾台風から65年という長い年月が経過し、高齢化による体験者の減少や記憶の風化が課題となっている。一般社団法人中部地域づくり協会の調査によると、伊勢湾台風を知らない中学生・高校生は約50%に達している。近年の水害の激甚化を受け、当協会地域づくり技術研究所が、伊勢湾台風の記憶と記録の伝承を目的とし、若年層を対象に、AI語り部による伝承システム「伊勢湾台風AI対話システム」を制作した。このシステムは、防災教育支援として防災講座などで活用し、伊勢湾台風を次世代に継承する取組を進めている。

2. 事業の概要

AIシステムは、AI会話ツールであるChatGPT（人工知能）を活用し、被災者の立場になりきってAIが回答を生成することで、対話型の学習を可能にしている。令和5年9月から企画の検討に着手し、令和6年4月から制作を開始した。著作権等の問題を考慮し、リーガルチェック（法律上の問題がないかを確認・検討する行為）も行った。

制作に当たり、適切な回答を導き出すために、子どもたちが「何を知りたいのか」を把握する必要があると考え、愛知・岐阜県内10校の小・中学生、高校生から約870件の質問を集めた。伊勢湾台風の記録集や体験談などの資料をもとに回答を作成し、質問とともにAIに学習させた。生成する回答の正確性を確保するため、トライアルと修正を繰り返し、作成には約4か月の期間を費やした。

さらに、より実用性が高いシステムとするため、伊勢湾台風で甚大な被害を受けた「弥富市立桜小学校」と連携し、試作を子どもたちや先生に体験してもらい、その意見をシステムに反映した。子どもたちからは「本を読んで勉強するよりわかりやすい。」「本当の人に質問するよりAIの方が質問しやすい。」など肯定的な意見があった。一方、先生からは、回答について、スピード、テキストの全体表示やルビの追加など、改善につながる意見をいただいた。



AI語り部「伊勢 湾太郎さん」の回答画面

3. 事業の成果

公開は、伊勢湾台風発生日の前日9月25日に、「弥富市立桜小学校」の防災講座で行った。より身近に語り部との会話を体験できるよう、5～6名のグループワーク形式で行い、子どもたちが質問を考え、各自AI語り部に質問し回答を記録した。対話型で自身の興味・関心に基づき伊勢湾台風についての理解を深めることで、子どもたちが災害をより自分事として捉えるようになっている。メディアの関心も高く、当日はテレビ4局、新聞2社の取材があった。子どもたちは人と話しているかのような体験に驚くとともに、AIとの会話を楽しんでおり、今後、防災教育支援への活用が期待できる。また、高齢化により伝承が困難な他の災害にも適用が可能である。



AI語り部を活用した防災講座（弥富市立桜小学校）

4. おわりに

伊勢湾台風の記憶が薄れつつある中、最新技術であるAIを活用した伝承ツールの有効性を確認できた。令和6年度の防災講座は、85校で実施し、受講者は約6千人にのぼった。今年度以降も同程度の実施を見込んでおり、体験者の意見を踏まえて改良を進めていく予定である。